

両親間の絆や不和が女子大学生の自尊感情と無力感におよぼす影響

森下正康
(児童学科教授)

岸畑あゆみ
(京都市洛西福祉事務所)

問題

子どものパーソナリティ発達にとって、安定した家族関係が重要である(茂木, 1997; 森下, 1991)。乳児の母親や幼児の母親を対象とした研究では、いずれも子どものアタッチメントの安定性は、夫婦間の愛情や調和性と関連していた(福田・宮下, 2006; 数井ほか, 1996)。また、小学生とその両親に対する調査からも、両親間の愛情の強さが子どもの抑うつ性の少なさと関連していた(菅原ほか, 2002)。他方、両親の離婚または別居などは、子どものパーソナリティ発達にとって不安定な要因となっている。両親の不和は、家族機能を不全にし、家族に対する不信感を子どもに抱かせ、家庭を居づらい場所にしてしまうという(増田ほか, 2004)。

本研究において、両親間の調和(絆)や不和が、子どもの自尊感情と無力感にどのような影響を与えるかを明らかにしたい。そこで、まず両親間の調和や不和が、親子関係にどのような影響を与えるかを検討したい。先行研究によれば、両親の関係の良好さが家族機能と親子関係の良好さを規定すると考えられる(宇都宮, 1999)。夫婦の愛情関係が良好であると、母親の乳児への関わりが長く続き、愛情関係が希薄であるとその関わり方が否定的なものであった(大場, 2006)。また、両親間の愛情関係は両親の子どもに対する態度の暖かさとは関連していたが、過干渉傾向とは関連していなかった(菅原ほか, 2002)。

他方、両親間の葛藤や不和は、母親・父親・娘の三者関係に複雑な不安定な影響を与えると予想される。両親の不和が続くと、子どもは特

に母親との信頼関係を築くことができず、両親との接触を避けるようになるという(萩原, 2005)。また、中学生とその両親を対象とした研究では、男女に共通して、夫婦間葛藤は子どもに対する親の暖かさを低め、冷たさを強めるように働いていた(氏家ほか, 2010)。そこで、両親間の愛情関係(絆・調和)が良好であれば、両親は子どもに対して受容的であり、両親間が不和であれば、両親は子どもに対して拒否的、統制的である、ということを確認したい。

次に、子どもに対する親の態度は、子どもの自尊感情や無力感の形成にどのような影響を与えるだろうか。従来の研究によると、家族の凝集力の高さは、子どもの自尊感情を高め、自信や統制感の欠如を抑制することが示されている(諸井, 2007)。また、これまで、親の受容的態度は子どもの自尊感情や自己評価と結びついていくとする研究が多い(森下, 1988)。自分を価値ある存在としてとらえる自尊感情(自尊心・自己評価)の根底には、親から受容されているという信念が横たわっていると考えられる。その反対に、親から拒否されているという認知は、子どもの自尊感情の形成を阻害するだろう。

統制的態度に関連して、高校生を対象とした研究では、自己評価(自尊感情)の低い子どもの両親は干渉型であった(冷川ほか, 1981)。自分の意志や行動が尊重されないという統制的態度は、子どもの自尊感情の形成にマイナスの影響を与え、無力感の形成を促進すると考えられる。つまり、自己の存在が親から受容されないという認知(拒否的態度)や、親からの命令や指図が多くて自分の意志が尊重されないという

認知（統制的態度）は、子どもの自尊感情を低下させ、無力感を強めるのではないか。

ところで、両親間の調和や不和は子どもの自尊感情や無力感の形成に直接影響するかどうか。小学生とその両親に対する調査から、両親間の愛情の強さが、家族機能の良好さを媒介とし、子どもの抑うつ傾向の少なさと関連することが見出されている（菅原ほか、2002）。氏家ほか（2010）は、中学生とその両親を対象とした広範な研究によって、男女に共通して、夫婦間葛藤の直接効果は認められず、夫婦間葛藤は子どもに対する親の態度に影響し、その知覚を経由して子どもの抑うつ症状に影響するということが明らかにした。また、別の研究では、子どもの抑うつの低さは、両親間の愛情関係は関連せず、母親の養育の暖かさのみが関連していた（菅原ほか、2002）。

他方、両親の不和に関する認知が、女子の抑うつや自己への不信感と直接関連しているという結果もある（萩原、2004）。川島ほか（2007）の高校生を対象にした研究によれば、葛藤認知は家族雰囲気や媒介せず直接抑うつに影響をおよぼす、というモデルが最も適合していた。さらに、夫婦間葛藤の影響は、子どもの性別によって異なるという次のような指摘もある。青年期の男子では両親間の葛藤に対する恐れが抑うつ状態に関連するが、女子ではそのような直接の関連はみられず、母親との情緒的つながりが抑うつ状態を規定していた（川島ほか、2008）。直接効果に関する結果の相違は、研究対象の年齢や性別の違いだけでなく、夫婦間葛藤に関するデータソースの違いや分析方法の違いにも起因していると考えられる。

日頃、両親間の親和関係を見ている子どもには、安定した感情や両親に対する肯定的な感情が生じ、その反対に両親の不和状態を観察している子どもには、両親に対する否定的な感情（萩原、2005）だけでなく、自己に対する否定的な感情やストレスが生じるだろう。したがって、両親間の調和や不和に関する認知は、両親の養育態度を介して子どもに影響するだけでなく、直接影響すると考えられる。

以上の点を総合すると、次のような仮説が考えられる。仮説1. 両親間の調和（絆）は、子どもに対する受容的態度を介して、子どもの自尊感情を高めるだろう。他方、両親間の不和は、子どもに対する拒否的、統制的態度を介して、子どもの自尊感情を低下させ、無力感を高めるだろう。同時に、両親の調和は子どもの自尊感情を直接高め、両親の不和は子どもの自尊感情を直接低下させ無力感を高めるだろう。

両親間の葛藤のなかで、子どもの緩衝機能に新しく焦点を当てたい。両親が不和の状態にあるとき、子どもはそれに巻き込まれてしまうだろうが、その際、両親の間を取り持つような緩衝機能が発揮できるかどうか、子どもの自尊感情や無力感の形成に影響すると思われる。このような領域での研究は十分なされていないようである。そこで、次のような仮説を検討したい。仮説2. 両親の不和状態が強いほど子どもはそれに巻き込まれやすくなるが、自分が両親の不和の緩和（緩衝機能）に有効に機能できれば子どもの自尊感情は高くなるだろう。その反対に、有効に機能できなければ自尊感情が低くなり、無力感が高くなるだろう。

両親間の調和や不和が子どもの自尊感情や無力感に与える影響は、対人関係への感受性や自己への内省の強い青年期に顕著になるだろう。そこで、本研究では大学生を研究対象とした。

方法

1. 調査対象

女子大学生に対して、授業の前後に質問紙調査を実施し、その場で回収した。その結果、470名のデータが得られた。このうち、両親の居住形態が「同居」あるいは「単身赴任」である405名分を分析の対象とした。その内、記入漏れがないものが351名、記入漏れ（2カ所以内）があるため、欠損値に平均値を代入したものが54名であった。内訳は表1に示すように、児童学科と英文学科の学生が大半を占め、3回生が多かった。調査対象者の平均年齢は19.6歳（18～23歳）、父親の平均年齢は51.6歳（42～71歳）、母親の平均年齢は48.6歳（36～61歳）であった。

表1 分析対象者の内訳人数

学年	1	2	3	4以上	合計
児童学科	85	61	85	2	233
英文学科	0	18	93	9	120
その他	2	27	16	7	52
合計	87	105	194	16	405

2. 調査時期

2009年6月下旬～7月上旬。

3. 調査内容

(1) 自尊感情と無力感の測定

自尊感情については、山本・松井・山成 (1994) から10項目、無力感については青柳 (1994) から20項目、計30項目を用いた。ランダムに配列した項目に対して5段階評定 (4. 全くその通り, 3. その通り, 2. どちらでもない, 1. そうでない, 0. 決してそうでない) を求めた。

(2) 両親の受容と統制の測定

EICA親子関係診断 (辻岡・山本, 1976) の受容 (情緒的支持: ES) 10項目と統制 (CO) 10項目の計20項目を使用した。なお、EICA親子関係診断は中高校生向きのものであるため、一部を大学生向けの内容に変更した。父親、母親についてそれぞれの項目に対し、3段階評定 (2. はい, 1. ?, 0. いいえ) を求めた。

(3) 両親間の関係と自己の役割の測定

両親間の葛藤認知については、川島ほか (2008) から13項目を抜粋した。さらに、予備調査によ

り両親の絆に関して9項目、子どもの両親へのかかわり方に関して10項目を新しく作成した。各項目について4段階評定 (3. あてはまる, 2. ややあてはまる, 1. ややあてはまらない, 0. あてはまらない) で回答を求めた。

結果

1. 尺度の作成

(1) 自尊感情と無力感に関する因子分析

各項目に対する5段階評定について0点から4点と得点化した。次に、30項目について因子分析を行った。その手順としては、最初に主成分分析を行い固有値の変動 (スクリープロット) を参考にして、因子数を4と決定した。次に最尤法を用いて因子分析を行い、プロマックス回転により因子パターンを求めた。それぞれの因子に高く負荷している項目の特徴から、第1因子を「無力感」、第2因子を「自尊感情」、第3因子を「不安」、第4因子を「失敗への恐れ」と命名した。そこで仮説に関連した第1因子と第2因子について、高く負荷する項目の素点の和を尺度得点とした。その信頼性を確認するために α 係数を算出した結果、 α 係数は第1因子無力感 (.866) と第2因子自尊感情 (.828) は共に高く、高い信頼性が確認された。各尺度について得点分布を調べたところ、正規分布に近いものであった。「自尊感情」と「無力感」に関する項目を表2に示す。両尺度間の相関係数は-.503であった。

表2 自尊感情尺度と無力感尺度の項目

自尊感情尺度の項目

1. 何でも自分で積極的にやっていく方である。
2. 色々な良い素質もっている。
3. 自信をもって自分の考えを言える。
4. だいたいにおいて自分に満足している。
5. 少なくとも人並みには価値のある人間である。
6. 物事を人並みにはうまくやれる。
7. 自分に対して肯定的である。
8. 自分には自慢できることがあまりない。*
9. 内気でものごとに消極的だ。*

* 逆転項目

無力感尺度の項目

1. 自分は全くだめな人間だと思うことがある。
2. 自分は人よりダメだと思うことがある。
3. 何かにつけて自分は役に立たない人間だと思う。
4. 敗北者だと思うことがよくある。
5. とてもみじめだと感じることもある。
6. ひどく失敗することがある。
7. 後悔するようなことをよくやる。
8. 気分にかけてしまうことがよくある。
9. ひとりぼっちだと思うことがよくある。
10. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。
11. 何をすることも面倒で、疲れた感じがすることがある。

表 3 両親間の関係と緩衝機能に関する項目の因子パターン行列

質問項目	因子				共通性
	1	2	3	4	
1 両親は協力して何かをすることがある。	.746	.019	.039	-.011	.528
2 母は父のすることに關心がある。	.734	.040	.030	-.060	.478
3 両親は食事の時に会話をする	.720	-.013	-.032	-.085	.508
4 両親は二人ででかけることがある。	.719	.033	.039	-.015	.478
5 父は母のすることに關心がある。	.677	.052	.074	-.073	.385
6 家族ででかけることがある。	.646	.089	-.163	.112	.470
7 母は父に誕生日や結婚記念日など特別な日にプレゼントをあげる。	.585	.043	-.047	.113	.382
8 両親に共通の趣味がある。	.560	.043	.067	.073	.315
9 父は母に誕生日や結婚記念日など特別な日にプレゼントをあげる。	.495	-.021	.099	.137	.311
10 両親の教育方針は一致している。	.415	-.270	.118	-.059	.304
11 両親はよくけんかをしたりもめたりしている。	.165	.966	-.070	.000	.726
12 両親の間にもめごとがあっても怒鳴りあうことはめつたにない。	-.114	-.791	.118	.051	.460
13 両親はお互いの悪口や不満を家の中でよく言う。	-.107	.622	.029	.180	.509
14 両親はけんかが終わっても、お互いのことを怒ったままである。	-.110	.578	.132	-.013	.524
15 両親は愛し合っていないからけんかする。	-.348	.479	.042	.033	.548
16 私は両親のけんかを止められない。	.081	.393	.171	-.279	.278
17 両親はけんかするとき物を壊したり投げたりする。	.025	.381	.142	.090	.229
18 両親がけんかをしているのはたいてい父のせいだ。	-.036	.343	.162	-.100	.232
19 両親がけんかをするのはうまくいくか方法が分かっているから。	-.104	.324	.211	.177	.314
20 両親がけんかをしているのはたいてい母のせいだ。	.082	.072	.634	-.104	.417
21 両親がけんかをしているのはたいてい私のせいだ。	.039	.052	.524	-.024	.295
22 母は父とけんかをするとき私に当り散らす。	.072	.147	.524	-.047	.354
23 母は父とけんかしているとき私に母の味方になってもらいたがる。	-.077	.071	.515	.185	.402
24 父は母とけんかしているとき私に父の味方になってもらいたがる。	-.001	-.021	.363	.187	.185
25 私はなるべく両親に関わらないようにしている。	-.259	.076	.297	-.189	.286
26 父は母とけんかをするとき私に当り散らす。	-.016	.184	.294	-.033	.185
27 両親のけんかでどちらかの味方をしなくてもいいと思う	.060	-.087	.183	-.127	.029
28 私は両親にプレゼントをすることがある。	.108	-.021	-.110	.556	.358
29 私はアルバイトをして両親にご馳走することがある。	-.070	.123	-.159	.493	.215
30 私が母の悩みを聞いてあげると母は落ち着く。	.023	-.031	.075	.473	.250
31 私が父の悩みを聞いてあげると父は落ち着く。	.135	-.088	.214	.421	.300
32 私がけんかの仲裁をすると両親は冷静になる。	.066	-.081	.321	.351	.264
寄与	6.632	3.040	1.091	.829	11.592
寄与率(%)	20.7	9.5	3.2	2.6	36.2

表 4 因子に対応する尺度のα係数

因子	1 絆	2 不和	3 巻き込	4 緩衝
α係数	.868	.836	.680	.611

(2) 両親間の関係と緩衝機能に関する分析
 32項目について4段階評定を0点から3点と得点化し因子分析を行った。その手順は前述の因子分析と同じであった。最終的にプロマックス回転により4因子解を得た(表3)。

それぞれの因子に高く負荷している項目の特徴から、第1因子を「両親の絆」、第2因子を「両親の不和」と命名した。第3因子は子どもが両親の葛藤に巻き込まれている程度を示し「巻き込まれ感」と命名した。第4因子は、子どもが母親や父親の話聞いてあげたり仲裁をしたりというように、両親の間を取り持つ働きを示しているので「緩衝機能」と命名した。因子間相関と α 係数を表4に示す。 α 係数は、第1因子と第2因子は高い信頼性を示し、第3と第4因子は必ずしも高い値とはいえなかったが、以後の分析で用いた。

2. 仮説の検討

(1) 両親間の特徴と養育態度との関連

両親の絆が強いほど子どもに対する両親の受容得点が高いかどうかをみるために、まず「両親の絆」得点について約3分の1ずつになるように尺度得点が高い者(H)、中間の者(M)、低い者(L)の3群に分けた。そして「両親の絆」を独立変数とし「受容得点」を従属変数として一要因の分散分析を行なった。その結果、母親と父親それぞれについて有意差があり(母親： $F(2,402)=16.081, p<.001$ ，父親： $F(2,402)=60.514, p<.001$)，多重比較の結果、両親の絆の強い群ほど、母親父親共に受容得点が高かった。従属変数を統制得点(CO得点)に変更して、同じように分散分析を行ったが、いずれも有意差はみられなかった。

次に、両親の不和を独立変数として受容得点について分析した結果、母親父親についてそれぞれ有意差があり(母親： $F(2,402)=8.774, p<.001$ ；父親： $F(2,402)=31.855, p<.001$)，さらに多重比較の結果、両親の不和が強い群ほど、母親父親共に受容得点が低かった。統制得点についても、同じような分析を行った結果、母親父親それぞれについて有意差があり(母親： $F(1,402)=15.537, p<.001$ ，父親： $F(1,402)=20.101, p<.001$)，多重比較の結果、不和得点の高い群ほど統制得点が高かった。

(2) 養育態度と自尊感情、無力感との関連

両親の受容が高いほど子どもの自尊感情は高

いかどうか検討した。最初に「受容」得点が高い者(H)、低い者(L)が約半分ずつになるように、父母それぞれについて分類した。子どもの自尊感情を従属変数として2(母の受容L・H)×2(父の受容L・H)の二要因の分散分析を行った。その結果、父の受容要因についてのみ有意差がみられ($F(1,402)=7.609, p<.01$)，L群よりH群の方が子どもの自尊感情得点が高かった(図1)。母親の受容要因には有意差がなく、また交互作用も有意でなかった。ここで父母それぞれの受容得点の度数分布図をみると、母の受容得点は分散が小さく高得点に偏っており、父の受容得点は分散がやや大きくばらつきを示していた。

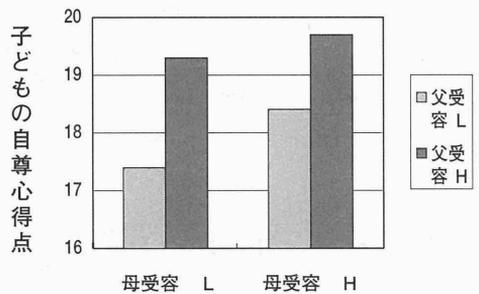


図1 両親の受容と子どもの自尊感情

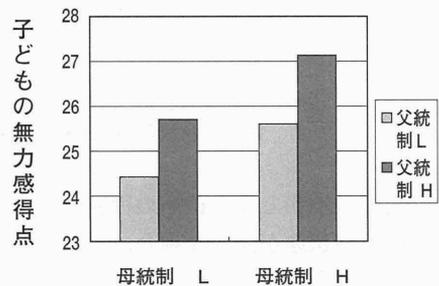


図2 両親の統制と子どもの無力感

次に、両親の統制が高いほど子どもの自尊感情は低いかどうかをみるために、同様な分析を行ったが、いずれの要因も有意差がみられなかった。さらに、両親の統制が高いほど無力感が高いかどうかについて分析を行った。先程と同じように、子どもの無力感を従属変数として2(母の統制L・H)×2(父の統制L・H)の二要因の分散分析を行った。その結果、両親共に

10%レベルの有意差がみられ(図2), いずれも統制が高い群の方が無力感が高かった。

(3) 両親—態度—自尊・無力感のパス解析

仮説1を総合的に検証するために, AMOSを利用してパス解析を行った。仮説に沿ってパス図を作成して分析し, 有意なパスだけを残して再び分析して, 図3のような結果を得た。図には有意なパスだけを示している。モデルの適合度の指標をみると, GFIおよびCFIは0.90を超えているが, AGFIとRMSEAは必ずしも望ましい

値とはなっていない。両親間の絆は母親の受容と父親の受容を高め, それを介して子どもの自尊感情を高めていた。絆の自尊感情への直接的なパスは, 約10パーセントレベルであり, 有意ではなかった。他方, 両親間の不和は, 母親の統制を高め, 父親の統制を高め受容を低下(拒否)させていた。そのような母親の統制と父親の拒否的な態度が子どもの無力感を高めていた。不和の無力感への直接的なパスも約10パーセントレベルであり, 有意ではなかった。

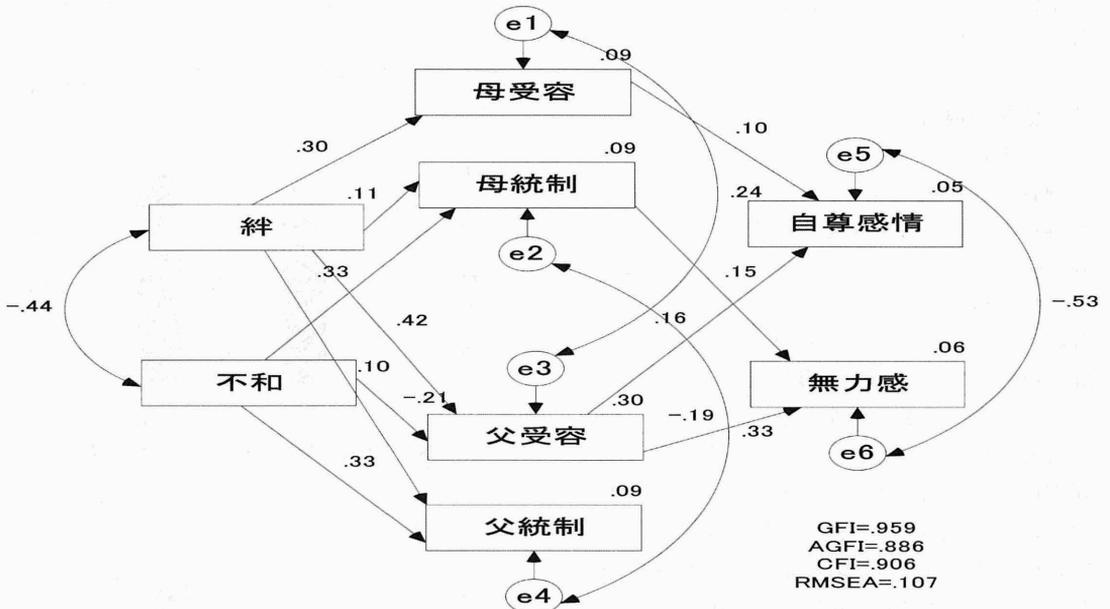


図3 両親の絆・不和—養育態度—子どもの自尊感情・無力感のパス図

(4) 両親の不和と緩衝機能の役割

両親の不和状態が深刻な場合, 子どもが葛藤に巻き込まれやすくなるかどうかについて検討した。そのために「両親の不和」得点について約3分の1ずつになるように尺度得点が高い者(H), 中間の者(M), 低い者(L)の3群に分けた。この「両親の不和」を独立変数とし, 「巻き込まれ」得点を従属変数として一要因の分散分析を行なった。その結果, 有意差 ($F(1,402) = 70.433, p < .001$) があり, さらに多重比較の結果, 「巻き込まれ」得点は, 「両親の不和」がL群よりもM群, M群よりもH群の方が有意に高かった。

次に, 葛藤に巻き込まれた場合に, 両親の不和状態の改善に自分が有効に機能できれば, 子どもの自尊感情は高くなり, そうでないと自尊感情は低くなるかどうか, 検討を行った。最初に「巻き込まれ」の得点が高い者(H), 低い者(L)の二つに分類した。次に「緩衝機能」の得点が高い者(H), 低い者(L)の二つに分けた。これらを独立変数とし, 子どもの「自尊感情」を従属変数として, 2(巻き込まれL・H) × 2(緩衝機能L・H)の二要因の分散分析を行った。その結果, 交互作用はなく, 緩衝機能にのみ有意差 ($F(1,401) = 15.639, p < .001$) がみられ, 緩衝機能H群の方がL群よりも自尊感情が高いと

いう結果であった(図4)。

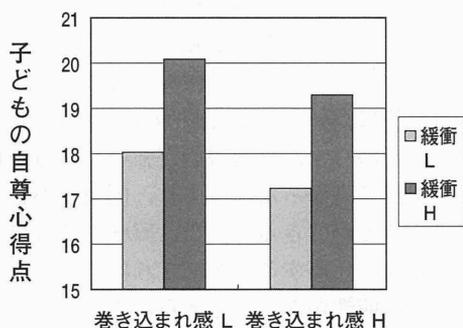


図4 巻き込まれ・緩衝と自尊感情

「無力感」に関しても同様の分析を行った結果, 巻き込まれ要因 ($F(1,401)=9.458, p<.01$) と, 緩衝機能 ($F(1,401)=13.082, p<.001$) に

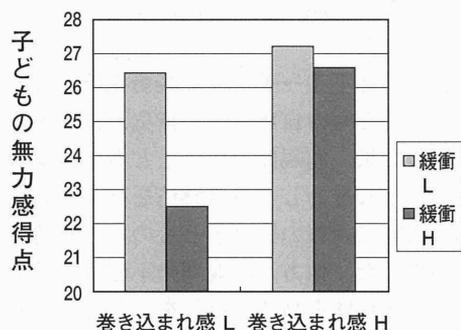


図5 巻き込まれ・緩衝と無力感

有意差がみられ, さらに交互作用も有意であった ($F(1,401)=3.671, p=.05$)。図5に示すように, 巻き込まれL群において, 緩衝機能L群の方がH群より無力感が高いということ, そして緩衝機能H群においては巻き込まれH群の方がL群よりも無力感が高いという結果であった。つまり, 巻き込まれL・緩衝機能H群の無力感が他の群よりも著しく低かった。したがって, 無力感に関する緩衝機能の効果は, 巻き込まれL群においてのみ認められた。

(5) 両親—緩衝—自尊・無力のパス解析

仮説2を総合的に検証するために, パス解析を行った。仮説に沿ってパス図を作成して分析した結果, 最終的に図6のような結果が得られた。図には有意なパスだけを示している。適合度を示す指標はいずれも適合度の高さを示していた。両親間の絆は子どもの緩衝機能を高め, それを介して自尊感情を高めていた。同時に両親の絆は子どもの自尊感情を直接高めていた。他方, 両親間の不和は, 子どもの巻き込まれ感を著しく高め, それを介して無力感を高めていた。また, 子どもの緩衝機能は無力感を低下させるように働いていた。両親間の不和は子どもの無力感を直接高めていた。そして, 両親の絆は子どもの巻き込まれ感を高め, 両親の不和は緩衝機能を高める作用も認められた。

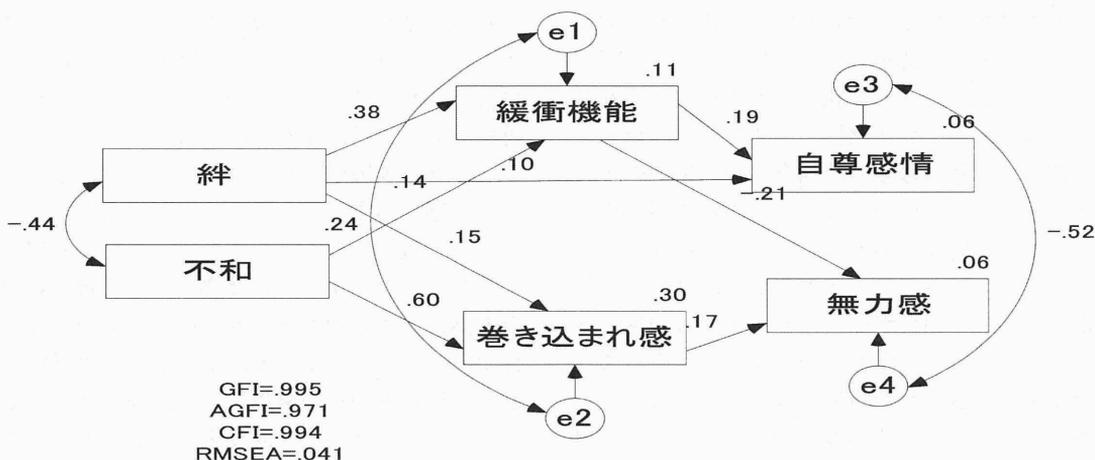


図6 両親の絆・不和—緩衝機能・巻き込まれ感—自尊感情・無力感のパス図

考 察

両親の関係が子どもの養育態度にどのような影響を与えるかについて分散分析をした結果、両親の絆が強い群の方が両親共に受容得点が高かった。しかし、統制得点に関しては有意差がなかった。両親の関係が親和的で絆が強い家庭において、両親の娘との関係もまた親和的で受容的だといえる。他方、両親の不和について、いろいろなパターンが予想されたが、両親の不和が大きい家庭においては、一般に娘に対する両親の態度が拒否的で統制的だということが明らかとなった。両親の不和が父親と母親の心の不安定さを引き出し、娘に対する拒否的、統制的態度を引き起こしている可能性がある。

親の養育態度が子どもの自尊感情にどのような影響を与えるかについては、父親の受容得点が高い群の方が子どもの自尊感情得点は高かった。しかし、母親に関しては有意差がなかった。父親の受容的態度が子どもの自尊感情の形成にプラスの影響を与えているようだ。他方、母親について、受容が子どもの自尊感情の形成に影響しないというよりは、母親の受容得点の分布が全般に高得点側に偏っており、群分けによる弁別性が低かったためではないかと考えられる。子どもの自尊感情について、両親の統制に関しては有意差がなかった。しかし、無力感については、父親も母親も統制が強い群の方が、子どもの無力感は強いという傾向があった。

パス解析の結果、両親の絆と不和→養育態度→子どもの自尊感情・無力感について、両親間の絆は母親の受容と父親の受容を高め、それを介して子どもの自尊感情を高めていた。他方、両親間の不和は母親の統制を高め、父親の統制と拒否を高めていた。ここで、両親間の不和が子どもに対する母親の受容的態度に影響していない点が注目される。そのなかで、母親の統制が強く父親の拒否が強いほど、子どもの無力感が高いということが明らかとなった。このような結果は分散分析の結果とほぼ一致していた。両親の絆の自尊感情への直接的なパスや、不和の無力感への直接的なパスは、微妙な値であった。したがって、仮説1は部分的に支持された

といえよう。

両親の葛藤への巻き込まれ感について、両親の不和が強いほど子どもが強く巻き込まれてしまうという結果であった。両親に対する子どもの緩衝機能については、葛藤への巻き込まれの強さにかかわらず、緩衝機能が強い群の方が自尊感情得点は高かった。つまり、両親の不和を緩和することができるような、家庭内での自分の存在意義を見出すことができれば、自尊感情を高める可能性があると考えられる。

他方、無力感に関しては交互作用がみられ、巻き込まれの程度が低くかつ緩衝機能が高い群において、無力感が他の群よりも著しく低かった。つまり、無力感に対する緩衝機能の効果は巻き込まれの程度の低い群においてのみ認められ、両親の不和にある程度強く巻き込まれてしまうと、緩衝機能は有効に働かないということが示唆された。

両親の絆と不和→子どもの緩衝機能と巻き込まれ感→子どもの自尊感情・無力感に関するパス解析の結果、両親間の絆は子どもの緩衝機能を高め、それを介して自尊感情を高めていた。また、同時に両親の絆は子どもの自尊感情を直接高めていた。他方、両親間の不和は、子どもの巻き込まれ感を高め、それを介して無力感を高めていた。そこに、子どもの緩衝機能は無力感を低下させるように働いていた。また、両親間の不和は子どもの無力感を直接高めていた。これらの結果は、分散分析の結果と同じ方向性を示しており、モデルの適合度も高く、仮説2は支持されたといえる。つまり、子どもの自尊感情の高さには、両親の絆と緩衝機能というポジティブな要因が関与していた。一方、子どもの無力感の強さには、両親の不和や巻き込まれ感、緩衝機能の弱さというネガティブな要因が関与していた。また、自尊感情には両親の絆が、無力感には両親の不和が直接関与している可能性があった。したがって、子どもの自尊感情の形成と無力感からの解放には、両親の絆の強さや不和の少なさ、その間で果たす子どもの緩衝機能の重要性が示唆される。このように、自尊感情と無力感の形成には異なった要因が関与し

ていると考えられる。

以上、両親の関係が子どもに対する養育態度に影響し、その養育態度の特徴が子どもの自尊感情や無力感の形成に影響するという視点から結果を解釈してきた。しかし、それとは別に、子どもや人に対する親自身の一般的な受容的態度が両親間の絆を強めている可能性もある。また、親自身の一般的な拒否的、統制的な態度が、両親間の不和を引き起こしているという可能性もある。さらに、子どもの自尊感情の高さが受容的な親子関係を誘発し、子どもの無力感が親の拒否的で統制的な態度を誘発する可能性もある。さらに、子どもの特徴が両親の絆を支える可能性や、不和の原因になる可能性もある。実際にはこのような父親・母親・子どもの三者関係は、相互規定的なものであろう。

このようなパスを考慮したモデルを作成して、新たにパス解析を行った。その結果、自尊感情・無力感から親の養育態度へのパスや両親の絆・不和へのパスはいずれも有意でなかった。他方、養育態度から両親間の絆・不和へのパスのうち、父親の受容から絆へのパスと、父親の統制から両親間の不和へのパスが有意であった。つまり、父親の受容的な態度が両親間の絆を強め、統制的な態度が両親間の不和を強める可能性があった。このような父親の受容や統制は子どもに対する態度であると共に、母親に対する態度でもあることを示唆しているだろう。なぜこのように、父親の態度のみが両親間の関係に寄与しているかについては今後の課題である。

本研究には、次のような検討課題が残された。(1)パス解析の結果、両親の絆と不和→養育態度→子どもの自尊感情・無力感に関するモデルは、必ずしも適合度の高いモデルではなかった。(2)すでに大学生を対象とした研究において、両親の態度と子どもの自尊心(自尊感情)との関係について性差が見られている(芝山・新井, 2004)点から、男子についての研究も必要である。(3)両親の関係という微妙な問題を扱ったが、特に両親の絆や葛藤、子どもの葛藤への巻き込まれに関する測定についての工夫が必要である。(4)調査対象者には自宅生と下宿生の両方が含まれ

ていたため、現在の両親の関係からの影響に差異があると考えられ、分離すべきであった。(5)今後、年齢幅の広い対象について発達的な検討が必要だろう。

要約

本研究は、両親の絆や不和、子どもに対する態度、両親の仲を取りもつ緩衝機能が、子どもの自尊感情や無力感にどのような影響を与えるか明らかにすることを目的とした。

女子大学学生405名に対し質問紙調査を行い、両親間の絆と不和状態の強さ、子どもの葛藤への巻き込まれ感と緩衝機能の強さ、子どもの自尊感情と無力感を測定した。因子分析により尺度を作成し、信頼性を確認した。

(1) 分散分析の結果、両親の絆が強い方が両親共に受容得点が高く、両親の不和が強い方が両親共に拒否得点と統制得点が高かった。

(2) 父親の受容得点の高い群の方が、子どもの自尊感情は高いということが明らかとなった。また、父親と母親の統制得点の高い群の方が、子どもの無力感強いという傾向があった。

(3) パス解析の結果、両親間の絆は、母親の受容と父親の受容を高め、その受容的態度を介して子どもの自尊感情を高めていた。他方、両親間の不和は、母親の統制を高め、父親の統制と拒否を高めていた。そのうち母親の統制と父親の拒否的態度が子どもの無力感を高めていた。両親間の絆や不和の子どもに対する直接効果があるとはいえなかった。したがって、仮説1は部分的に支持されたといえよう。

(4) 分散分析の結果、両親の不和状態が深刻なほど、子どもはその葛藤に巻き込まれやすくなることが明らかとなった。また、両親間への緩衝機能が高い群の方が自尊感情得点は高かった。巻き込まれの程度が低く緩衝機能の高い群は無力感が低く、たとえ緩衝機能が高くても巻き込まれ感が強い場合は無力感が高かった。

(5) パス解析の結果、両親間の絆は子どもの緩衝機能を高め、それを介して自尊感情を高めていた。同時に両親の絆は子どもの自尊感情を直接高めていた。他方、両親間の不和は、子ど

もの巻き込まれ感を高め、それを介して無力感を高めていた。また、両親間の不和は子どもの無力感を直接高めていた。その反対に、子どもの緩衝機能は無力感を低下させるように働いていた。全体として、仮説2は支持された。

引用文献

- 青柳 肇 1994 無力感尺度. 堀洋道・山本真理子・松井豊編心理尺度ファイル—人間と社会をはかる— 垣内出版, 535-539.
- 福田佳織・宮下一博 2006 子どものアタッチメント安定性と夫婦関係との関連—父子接触時間の長い家庭と短い家庭での相違— 千葉大学教育学部紀要, 54, 7-13.
- 萩原英俊 2004 両親の不和が子の心理的発達に及ぼす影響—青年女子の場合—その1. 不和への介入度と心理的危機との関係を中心に. 淑徳短期大学研究紀要, 43, 55-83.
- 萩原英敏 2005 両親の不和が子の心理的発達に及ぼす影響—青年女子の場合—その2. 不和状態が作り出す, 親子関係. 淑徳短期大学研究紀要, 44, 29-48.
- 川島亜紀子・眞榮城和美・菅原ますみ・酒井 厚・伊藤教子 2007 両親の夫婦間葛藤が青年期の子どもの精神的健康に及ぼす影響. 日本教育心理学会49回総会発表論文集, 503.
- 川島亜紀子・眞榮城和美・菅原ますみ・酒井 厚・伊藤教子 2008 両親の夫婦葛藤に対する青年期の子どもの認知と抑うつとの関連. 教育心理学研究, 56, 353-363.
- 数井みゆき・無藤 隆・園田菜摘 1996 子どもの発達と母子関係・夫婦関係: 幼児をもつ家族について. 発達心理学研究, 7, 31-40.
- 増田彰則・山中隆夫・武井美智子・平川忠敏・志村正子・古賀靖之・鄭忠 和 2004 子どもからみた家族機能の評価とそれに及ぼす家庭環境の影響. 心身医学, 44, 851-860.
- 茂木千明 2007 健康な家族機能に対する家族の評価. 仙台白百合女子大学紀要, 11, 65-80.
- 森下正康 1988 児童期の母子関係とパーソナリティの発達. 心理学評論, 31, 60-75.
- 森下正康 1991 母子関係新・児童心理学講座第12巻家族関係と子ども, Pp. 31-72.
- 諸井克英 2007 家族機能認知とアダルト・チルドレン傾向. 同志社女子大学学術研究年報, 58, 85-92.
- 大場美保子 2006 CPCS使用による乳幼児期における父—母—子三者相互作用の検討—夫婦関係・子どもへの愛着・父母の抑うつの観点から— 名古屋大学心理発達科学専攻修士学位論文概要, 218-220.
- 冷川昭子・蘭 千壽・原田純治 1981 環境適応に及ぼす Self-esteem と両親の養育行動の効果. 健康科学, 3, 133-140.
- 芝山 直・新井真由美 2004 青年期における性約割観と自尊心との関連—両親の養育態度への認識内容からの検討. 新潟大学教育人間学部紀要, 7, 15-27.
- 菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則 2002 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連—家族機能および両親の養育態度を媒介として—. 教育心理学研究, 50, 129-140.
- 辻岡美延・山本吉広 1976 親子関係診断尺度EICAの作成—因子的真实性の原理による項目分析. 関西大学社会学部紀要, 7, No. 2, 1-14.
- 氏家達夫・二宮克美・五十嵐 敦・井上裕光・山本ちか・島 義弘 2010 夫婦関係が中学生の抑うつ症状におよぼす影響: 親行動媒介モデルと子ども知覚媒介モデルの検討. 発達心理学研究, 21, 58-70.
- 宇都宮博 1999 青年がとらえる両親の夫婦関係—親子関係, 家族システムとの関連—. 日本家政学会誌, 50, 455-463.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1994 自尊感情尺度 (Self-Esteem Scale). 堀洋道・山本真理子・松井 豊編心理尺度ファイル—人間と社会を測る—. 垣内出版, 67-69.